

I 第一朗読(知恵の書 12章 13・16―19節)

- 13 すべてに心を配る神はあなた以外におられない。  
だから、不正な裁きはしなかったと、  
証言なさる必要はない。
- 16 あなたの力は正義の源、  
あなたは万物を支配することによって、  
すべてをいとおしむ方とられる。
- 17 あなたの全き権能を信じない者に  
あなたは御力を示され、  
知りつつ挑む者の高慢をとがめられる。
- 18 力を駆使されるあなたは、寛容をもって裁き、  
大いなる慈悲をもってわたしたちを治められる。  
力を用いるのはいつでもお望みのまま。
- 19 神に従う人は人間への愛を持つべきことを、  
あなたはこれらの業を通して御民に教えられた。  
こうして御民に希望を抱かせ、  
罪からの回心をお与えになった。

言葉の解説

■知恵の書は紀元前1世紀にアレキサンドリアで書かれた「護教的な性格を持った知恵文学」。ギリシア語で書かれた「第二正典」の一つ。「知恵の書」の全体構成は次の通り。

第一部(1―62)

人間存在の意味

① 1―15

知恵の探求への呼びかけ

② 16―24

神に逆らう者と従う者

③ 25―31

神による死後の賞罰

④ 32―40

神に従う者と逆らう者

⑤ 41―50

知恵の探求への呼びかけ

第二部(62―91)

知恵の本質

⑥ 62―70

知恵を語る

⑦ 71―80

ソロモンの出生

⑧ 81―90

知恵の価値

⑨ 91―100

知恵の特質

⑩ 101―110

知恵の価値とそれへの愛

⑪ 111―120

ソロモンの出生

⑫ 121―130

知恵を祈り求める

第三部(131―192)

救いの歴史と知恵の働き

13節 ■「すべてに心を配る」。「すべてに(パース)」は「すべての人に」の意味も可能。「心を配る」と訳された動詞メローは「気にかかる・重要である」の意味。神の関心からはずれる人や事物はひとつもないので、神の下した判断(裁き)が誤ることはない。

16節 ■「正義の源」。ここでの「正義」は、神が行う正義であって、人間が行う正義。名詞「源(アルケー)」は「始原」の意味。神は万物に心を配る方で、最もふさわしい裁き(救

い)を行う方。そこで人間も正義を行える。■「いとおしむ」。この動詞フェイドマイは「手控える」の意味(一二八を参照)。なお、この節の「万物」も「すべて」も13節と同じパーズ。

17節■「全き権能」。直訳は「能力(デユナミス)の完全さ」。■「知りつつ挑む者の高慢をとがめられる」。直訳は「知る者たちにおいては大胆さをとがめる」。神の能力の完全さを知りながら、大胆不敵に振る舞う者をとがめる。

18節■「駆使される」。この動詞デスポソーは16節の「支配する」と同じ動詞。■「寛容をもって…大いなる慈悲をもって…」。どんな状況になろうとも、力を駆使することのできる神は、「寛容」と「慈悲」という余裕を常に持っている。■「力を用いる」。この語デユナマイは17節のデユナミスの動詞形。

19節■「罪からの回心を…」。原文ではこの文章は理由の接続詞(ホテイ)に導かれた理由文。希望をもつことのできる根拠を示しているだろう。

①第三部「歴史における知恵の働き」ではまず10章で知恵の働きを総括的に述べ、11章から19章では「エジプト脱出」を題材として、神に逆らう者(エジプト人)への罰と神に従う者(ヘブライ人)への恵みを描き出している。しかし、11章17節から12章22節までは、出エジプトからは離れ、「神の忍耐」にテーマを絞って議論を展開している。

①ー17ー22 神の力は忍耐によって示される

②ー23ー一二八 神の愛は忍耐によって示される

③ー二九ー18 神の忍耐は回心を促す

④ー二九ー22 神の忍耐は寛容を教える

このように「神の忍耐」を強調するのは、「知恵の書」の時代背景と無縁ではない。この書は紀元前1世紀にエジプトのアレキサンドリアで著されたと考えられている。アレキサンドリアはディアスポラ(パレスチナを離れて暮らす)ユダヤ人が多く住む都市。ヘレニズム文化が栄えていたこの町は、ユダヤ人にとって伝統的な信仰を捨てさせるような誘惑に満ちていた。彼らの中にはヘレニズム文化を積極的に取り入れ、異教の人々の仲間となる人もいたはず。そこで、「知恵の書」は、イスラエルの知恵のすばらしさを示すことによって、信仰に踏みとどまるようにと説いている。

この書は「異教社会に同化する人が現れたのは、神が無力だからではなく、神は忍耐しているのだ。全能である神は一息で神に逆らう者を滅ぼす力を持っている(一一17ー22)。しかし、神はその全能のゆえに、すべての人を回心させようとして人々の罪を見過(こ)しているのだし(一一23ー一二八)、神を信じない者には徐々に罰を加えることによって、回心の機会を与えているのだ(一二九ー12)」と説くことによって、先祖伝来の信仰の価値と意義を教え、そこに留まることを求めている。

この箇所は三つの小部分に分けることができます。13ー16節は「すべてに心を配る神」で始まり、「すべてをいとおしむ方」で終わっており、すべてに及ぶ神の支配を述べている。神は「すべてを正しく治める」方ですから、「不正な裁きはしなかった」とわざわざ証言するまでもない。神の力は実に「正義の源」なのであり、その支配は「すべてをいとおしむ」ための支配である。

続く17ー18節では、神はその全き権能を信じない者に力を示すけれども、それは「寛容」と「大いなる慈悲」をもった裁きであり、いつでもその力を用いることのできる神はそれをむやみに振るうことがない、と教える。真に力のある者は、やたらにそれを用いることはしない。最後(19節)にこのような支配にあずかる者がとるべき態度を述べる。神は慈しみ深く振る舞うことによって、我々が「人間への愛を持つべきこと」を「教えたのであり、こうして」御民に希望を抱かせ、罪からの回心をお与えになった」と説いている。神の忍耐は回心を求めている。

ことであり、同時に寛容を教えるためである。だから、神による裁きの目的は滅ぼすことにはない。むしろ、命へと人を招き、歩むべき道を示すことにある。

②「治める(ディオイケオー)」。この語は接頭辞ディアと動詞オイケオー(家をもつ)とによる合成動詞で、もともとは「家を管理し、運営する」の意味であり、そこから一般的に「治める・管理する」ことを表す。新約聖書には一度も使われず、七十人訳で5回、そのうち4回が「知恵の書」での用例である。知恵に満たされ、その指導に従うソロモンは諸国民を「治め」、国々を服従させることができる(知八14)、それは知恵が地の果てから果てまでその力を及ぼし、慈しみ深くすべてを「つかさどる」ことができるからである(八1)。

しかし、知恵によるこの働きの背後には、知恵の案内者である神がいる。しかも、この神は「慈しみ深く、真実な方。怒るに遅く、すべてを治める憐れみ深い方」なのである(二五1)。この箇所でも、大いなる慈悲をもって人を「治められる」神に使われている。紀元前1世紀に著わされた「知恵の書」が、知恵による神の配慮を強調するのは、ヘレニズム文明に押しつぶされそうなディアスポラのユダヤ人に伝統的な信仰観を思い起こさせるためである。

## Ⅱ第二朗読(ローマの信徒への手紙8章18―25節)

18 現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないといわたしは思います。19 被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20 被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。21 つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。23 被造物だけでなく、「霊」の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。

### 言葉の解説

18節 ■「現在の苦しみ」。「現在」とはキリストの復活と再臨との「中間の時期」を指す。キリスト者にとって、この時期は「この悪の時代」(ガラ14)と「キリストにおいてすでにあずかっている復活のいのちの時代」とが一つに重なり合った時期である。この時期におけるキリスト者の苦しみは、キリストの苦しみに参与する苦しみであり、「キリストと共にその栄光を受ける」(17節)ことになる苦しみである。■「現される」。動詞アポカリュプトーは「覆いを取り除く、示す」を意味する。ここでは神的受動態であり、「神が現す」の意味。今まで知られずにいた天上の神秘を神が開示する。19節の「現れるのを」は名詞アポカリュプシスである(二5、一六25)。

19節 ■「被造物は…切に待ち望んでいます」。直訳は「被造物の切望は…待ち望む」。この奇妙な言い回しによって、被造物のうめくような待望が強調されている。■「神の子たち」。いまキリストのうちにある者のことであり、終わりの時に彼らの真の姿が、神の栄光にあずかる「神の子」として現される。

20節 ■「虚無」。名詞マタイオテース。この語は「所期の目的を果たせなくなったものの空虚さ」とか、「そのために創られたのではない役割を持たされたものの空しさ」を表す。

23節 ■「霊の初穂」。「霊」という初穂の意味だろう。「初穂」は祭儀用語であり、あらゆる種類の「神にささげられる初物」を指す。ここでは、神が人に与える霊を収穫のイメージで捉えている。霊という初物を受けた今は、すでに救いは始まり、最後の収穫である復活に向かう今。

①「霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます」とパウロが言うとき(13節)、

その「生きる」とは、体の死を超えて続くいのちを指しています。なぜなら、霊を与えられた者も「死ぬはずの体」を持つ者であるからです(11節)。しかし神の霊は、神と関わることなく人間的な力を頼りとする生き方を終わらせ、私たちにいのちを与えます。このような神の霊に導かれた者は「神の子」です(14節)。そして「神の子」であるなら、神の相続人、しかもキリストと共同の相続人ですから、キリストと共に苦しみ、共にその栄光を受けることになるはず(17節)。パウロは「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べ、取るに足りない」と述べていますが(18節)、今週の朗読ではこの栄光に焦点が当てられています。

今週の朗読は、8章18節から30節まで続く段落の一部分です。この段落は「将来わたしたちに現されるはずの栄光」で始まり、「(神は)栄光をお与えになった」で終わっています。ですから、この段落は「栄光」で囲い込まれており、栄光がこの段落の主題と関わっているのは確かです。

「栄光」に挟まれた19―27節は、三つの部分に分けることができますが、いずれにも「うめき」という言葉が使われています。最初の19―22節では被造物の「うめき」が述べられます。被造物は虚無に服し「共にうめき、共に産みの苦しみを味わっています、同時に希望も持っています。神の子供たちが現れるとき、彼らと共に、栄光に輝く自由にあずかれるからです。

続く23―25節では、キリスト者の「うめき」が語られます。キリスト者は今、苦しみの中にうめきをあげていますが、霊の初穂をいただいているから、神の養子とされることを、つまり体の贖われることを希望を持って待ち望んでいます。

最後に26―27節では、霊が「うめき」を上げています。霊は、どう祈るべきかを知らない私たちに代わって、私たちのために「うめきをもって」執り成しています。

被造物は神の子供たちの現れを待ち望み、霊は私たちのために執り成しています。被造物にせよ、霊にせよ、彼らの関心はキリスト者へと集中しています。今、苦しんでいるキリスト者の救いこそが、彼らの関心事なのです。

このことは言葉の使い方からも確認できます。19―22節に使われた「被造物」は26―27節には現れませんし、26―27節に使われる「霊」は19―22節には現れません。しかし、23―25節を見ると、この部分には「被造物」も「霊」も登場しています。これは、被造物の関心も、霊の関心も、ただキリスト者に向けられていることしるしと言えます。被造物もキリスト者も霊もうめいています。しかし、このうめきは希望と切り離されたうめきではありません。それは、子供の誕生と同時に忘れ去られる産みの苦しみのように、大きな喜びへと変貌する苦しみです(ヨハ16:21)。確かに、栄光の完成はまだ将来のことです(18節)。しかし、30節に「栄光をお与えになった」と過去形で述べられているように、すでに始められた栄光なのです。キリスト者が生きる「この世」は、悪が最後の力を振り絞る世であると同時に、キリストの復活のいのちが支配する世でもあります。ですから、うめきながらも希望を持つことができます。キリスト者のうめきは諦めや絶望ではなく、大きな喜びの前ぶれです。キリスト者が最後の収穫である「体の贖い」をうめきながら待ち望むことができるように、神は「霊」という初穂を与えたからです。

## ②言葉の広がり。「虚無・マタイオテース」

この語は、「空、空虚、無用、目的のないこと、はかなさ」を意味し、新約聖書での用例は3回です。

エフェソ17では、異邦人の考えを「愚か」と言います。彼らの愚かさは、神の命から遠く離れていることであり、無感覚になって放縱な生活をし、あらゆるふしだらな行いにふけるという生活となって現れます。また、2ペト2:18では、偽教師のことを「無意味な」大言壮語

をする者と非難しています。彼らの言葉が無意味であるのは、迷いの生活からやっとなげ出てきた人々を、肉の欲やみだらな楽しみで誘惑するからです。

このような神から離れた被造物であるのに、ただ人間との関係だけで見られたり、神格化されることによって、「虚無」に服しています。しかし、被造物が陥っている現在の苦しみは偶然や運命によるのではなく、神によって引き起こされたのですから、それは究極的な救いへのステップです。そうであるなら、苦しみの中でうめきながら、希望を持ち続けることができるはずで

### Ⅲ福音 (マタイ 13章 24 - 30・36 - 43節)

24 イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。25 人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。26 芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。27 僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』28 主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、29 主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。30 刈り入れまで、両方も育つままにしておきなさい。刈り入れの時、『まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』と、刈り取る者に言いつけよう。』

(31 イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、32 どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。』33 また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。』34 イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。35 それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「わたしは口を開いてたとえを用い、／天地創造の時から隠されていたことを告げる。』)

36 それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると、弟子たちがそばに寄って来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。37 イエスは答えになった。「良い種を蒔く者は人の子、38 畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。39 毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである。40 だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。41 人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべてと不法を行う者どもを自分の国から集めさせ、42 燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。彼らは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。43 そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい。」

#### 言葉の解説

24 節 ■ 「持ち出して」。直訳「前に置いた」。マタイでの用例はことと31節の二回のみ。モーセがイスラエルの民とその長老たちの前に神の言葉を「置いた」という故事(出一九七)を踏まえているのだろう。

25 節 ■ 「毒麦」。高さ0・6〜1mほどに成長するイネ科の一年草。小麦によく似ている。特に穂の出る前は区別が難しく、見分けやすくなる収穫期に取り除く。種子に有毒成分テムリンを含み、人間が食べるとめまいや嘔吐を起こす。

31 節 ■ 「からし種」。黒からしの種は直径0・9〜1・6ミリほどで、重さは約1ミリグラム。白からしの種はその倍くらい大きき。黒からしの種はすりつぶして香辛料とするだけでなく、種油の一種にもなる。一年草であるからしは普通、1mほどにしかな伸びないが、時には3mにも伸びる場合がある。茎は太い。秋には茎や枝が堅くなり、小鳥の重さに耐えるほどの灌木になる。原文では「からしの」と「種粒」の二語で表現され、これが小さな一

粒であることが示されている。からし種は植物の中で最も小さいとされていて、そこから「少量・最小」を表す比喻として用いられる。

33節 ■「パン種」。浸透する悪の象徴として用いられるのが普通(出二二15以下、レビ二11、マタ一六5以下、1コリ五6以下、ガラ五9など)だが、ここでは天の国の活発な働きを象徴する良いものとして扱われている。■「三サトン」。一サトンは約12・8リットル。

37節 ■「人の子」。旧約聖書では単に「人間」を表すことが多い表現。新約聖書では「ダビデの子」「神の子」とともにメシアであるイエスの称号として用いられる。

① マタイ福音書にはイエスの講話だけを集中的にまとめた部分が五箇所あります。その結びは必ず、「イエスがこれらの言葉を語り終えられると……」で終わるので、見つけ出すのは簡単で、次の五箇所がそれです。

- 1 「山上の垂訓」 5・1〜7・29
- 2 「宣教派遣の説教」 10・5〜11・1
- 3 「天国のたとえ」 13・1〜15
- 4 「教会生活についての説教」 18・1〜19・1
- 5 「終末についての教え」 24・1〜25・46

今日の福音が含まれるマタイ13章は「天国のたとえ」と呼ばれる三番目の説教です。この説教は図に示したように、同じ構成を持つ三つの段落に分けることができます。

① たとえ (1—9 節)

「たとえ」で多くのことを語った」  
種まきのたとえ

② たとえの理解・不理解 (10—17 節)

イザヤ六9—10の引用

③ 解き明かし (18—23 節)

種まきのたとえの説明

④ たとえ (24—33 節)

「他のたとえを示した 天国は……」  
毒麦のたとえ  
「他のたとえを示した 天国は……」  
からし種のたとえ  
「他のたとえを示した 天国は……」  
パン種のたとえ

⑤ たとえの理解・不理解 (34—35 節)

詩編七八2の引用

⑥ 解き明かし (36—43 節)

毒麦のたとえの説明

⑦ たとえ (44—50 節)

「天国は……」  
隠された宝のたとえ  
「天国は……」  
「天国は……」  
真珠商人のたとえ  
「天国は……」  
網のたとえ

⑧ たとえの理解・不理解 (51—52 節)

①でたとえが語られ、②でたとえの理解・不理解が述べられ、③でたとえの解き明かしが語られます。このように三つの段落は同じ構成を持ちますが、しかし違いもあります。

①③には②が欠けている。

②A・Bでは①がはつきりと「たとえ」と言われているが③では「たとえ」という言葉は使われてはいない。この事実は、③のたとえが内容的にも形式的にもBの「たとえ」と一致するのを見ると、注目に値する。

③「たとえ」が語られる相手が異なる。Aでは群衆であり(3節)、Bでは「彼ら」に代わり(24・31・33節)、Cでは弟子が相手とされる。

以上の三点から考え、A・B・Cは同一の事柄の単純な反復ではなく、Cに向けてテーマが次第に高められるような反復だと言えます。たとえば、③に書いたようにたとえの聞き手は群衆(A)から弟子(C)に代わり、②に書いたようにCのたとえはもはや「たとえ」とは呼ばれてはいません。

「天の国の秘義(秘密)」を知った弟子たちには「たとえ」はたとえでなくなるからです。「たとえ」がたとえにとどまるのは「天の国の秘義」にまだ気づかぬ群衆の場合です。とすれば③で②が欠けた理由も理解できます。真に弟子となった者には、もはや解き明かしは不用だからです。

AからCへの進展は、群衆、すなわち「天の国の秘義」を知らぬ者が弟子、すなわち「天の国の秘義」をわきまえた者に変化する過程です。この章での群衆は弟子になるように招かれた人々であり、両者の間の境は固定されてはいません。真に弟子となった者にはたとえはたとえではなく、神の支配の秘義を明かす真理の言葉となります。マタイ13章は群衆から弟子へと変化するようにとの招きなのです。

マタイ13章が招きであることは、52節「天の国」のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている」からも分かります。傍線をつけた「天の国の」は原文では与格です。そして、その与格は「天の国について学んだ(弟子となった)」とも訳せるし、「天の国のために弟子となった」とも訳せます。天の国と言っても、いわゆる死後の天国ではありません。あらゆる出来事に見られる神の働きの現実を指しています。あらゆる出来事が神の働きを体得する学び舎となり、そこで学びつつある者が「天の国の弟子となった学者」と呼ばれます。従って「学者」といっても「ラビ」のような尊大な者ではなく、生徒、生徒として学び続ける者のことです。あらゆることに神の働きを見る眼を持てるなら、たとえはたとえではなくなり、真の弟子となります。彼は「新しいものと古いもの」を取り出します。神の働きの現実を知った者は、伝えられた言葉を状況に合わせて新たに語り直しますが、それでいて古いものから逸脱することがありません。神の働きのいるから、新しさも古さもない、自由自在の状態になります。

このように考えるなら、天の国(神の働きの現実)を見い出したものが、持ち物をみな売り払って畑や真珠を買う者にたとえられるのも納得できます。いったん天の国を手に入れるならあらゆるものを自由自在に取り出せるからです。

44 | 47節の三つのたとえは、24 | 33節の三つの「たとえ」と対応します。31 | 33節の対になった「たとえ」は44 | 45節の対となったたとえと対応し、24 | 30節の「たとえ」は47 | 50節のたとえに対応します。24 | 30節と47 | 50節では良いものと悪いものとの併存が語られますが、この良いものと悪いものは、倫理的善悪の区別というよりは、神の働きを見る者と見ない者の区別と考えるべきでしょう。神の働きを見ない者の未来は結局は暗闇になります。

「毒麦」のたとえに登場する僕は、主人の畑の中に現れた毒麦を見て、「抜き集めておきましょうか」と主人の意向を尋ねます。僕たちはすぐにでも毒麦を抜くのが良いと考えていますが、

主人はそれを許しません。「麦まで一緒に抜くかもしれない」ことを心配したからです。実際、毒麦は実をつけるまでは麦と区別することが難しく、農民は収穫の直前までそれをそのままにしておきました。

イエスはその知恵を借りて、天の国のありさまを語ります。毒麦を束ねる収穫者が働くのは「刈り入れの時」(30節)であり、今ではありません。今は毒麦を抜き取る時ではなく、神が毒麦を忍耐する時です。「刈り入れの時」には、毒麦は必ず焼き尽くされます。天の国に招かれた人は、今、毒麦への裁きは神に委ねるべきであることを知っています。「からし種」や「パン種」のたとえが示すように、天の国は神の計らいによって人の想像を超えるほどの豊かな「刈り入れの時」を迎えます。イエスはそれを知っているのに、悪に対して憐れみ深く、忍耐強く宣教します。そのイエスの姿に、神の憐れみと忍耐が示されます。

原文(ギリシア語)では、これら三つのたとえは「彼ら」に向けて語られたと表現されています(24、31、33節)。マタイ福音書では、イエスのたとえに耳を傾け、そこに「天の国の秘密」(二三11)を聴き取る者が「弟子」であり、聴き取れない者は「群衆」です。34節で「彼ら」が「群衆」に言い換えられています。イエスのたとえを理解できなかった「彼ら」は、「弟子」になれずに「群衆」で終わってしまっています。

今日の福音の冒頭(24節)は、たとえを「持ち出して」と表現されています。これは「前におく」という意味であり、モーセがイスラエルの民と長老たちの前で神の言葉を「語った」(出一九7)とされるときと同じ動詞です。イエスは新しいモーセとして、人々の前に神の言葉を置きます。イエスは人々を分け隔てしていません。「彼ら」が心を開いてそれを受け入れるなら、「弟子」になることができます。

初代教会は、終末に起こる裁きを視野に置いて「毒麦」のたとえを解釈しています。しかし、これを話したイエスの関心は、毒麦が蒔かれた過去の出来事や未来の刈り入れの時に向けられていません。イエスは、今、私たちに示されている神の憐れみ深さと忍耐強さを強調しています。弟子とはこのイエスの言葉に誠実に生きようとする者のことです。

## ②言葉の広がり。「畑・アグロス」

まず①「町や村の外の野・田舎」の意味。二人の弟子たちは「田舎」の方へ歩いて行く途中、イエスが姿を現わします(マコ一六12)。僕は「畑」から帰ると主人の夕食を用意します(ルカ一七7)。

次に②複数形で「農場・農園・村落」の意味。豚に汚れた霊が入り湖になだれ込んだのを見た豚飼いたちは町や「村」にそれを知らせました(マコ五14)。人々が「里」や村へ行って食べ物を手に入れるようにと解散させるべきだと弟子たちは考えました(マコ六36)。村であれ、町であれ、「里」であれ、イエスの行く所には人々が集まりました(マコ六56)。

最後に③「耕作されるべき」畑・農地」の意味。イエスは「野」の花をよく見て、誰が花を装わせているのか悟るようにと求めます(マタ六28)。婚宴への招待を無視し「畑」に出てゆく人もいますが(マタ二二5)、イエスは「畑」を捨てて従うようにと求めます(マコ十29)。そこでバルナバは「畑」を売り、その代金を使徒たちの足もとに置きました(使四37)。